

「退屈な話」(チエーホフ)

ニコライ・スチェパーノヴィチは名聲赫々たる老科學者で、今も現役の大學教授であつた。熱烈な戀愛結婚をして二人の子供を儲け、社會的地位も頗る高く、「私の一生は、美しい、天才的に仕あげられた名曲のやうな氣がする」と嘗ては自ら思ふ程であつたが、六十二歳になつた今、彼は世間體を維持すべく借金に苦しみ、知的活動の減退を痛切に思ひ知り、不眠症に悩み、めつきり痩せても來て、遠からざる死の豫感にひどく怯える毎日を送つてゐた。しかも昔は愛らしく知性豊かだつた妻が今や世間體と家計の事許りを氣にする「ぶくぶく太つた、みつともない」女になつてゐるし、娘にしても父親の金の苦勞を知りながら金の掛る音楽の勉強を諦めようとしなない。講義の度に倦怠感を覺えるし、無能な助手が自分の學問の跡繼になると思ふとやり切れない。結局、地位も名譽も學問も家族も、彼が「安らかな心で死を迎へ」られる氣分にさせてはくれないのである。

ただ、彼の亡友の娘で、幼い頃に面倒を見てやつたカーチャにだけはニコライは愛情を感じてゐた。

幼いカーチャはいつも「顔いつばいにきらきらと輝く」「信頼の表情」、「この世で行はれることはすべて、素晴らしく意味がある」といふ表情を湛^たへてゐたものだつたが、長じて演劇熱に取憑かれ、「高級な理想」を舞臺に求めて劇團に入つたものの、やがて低級な「野蠻人の群れ」としか思へぬ劇團に絶望し、自殺を圖^{はか}つて劇團を去り、今はニコライの家の近くに住み亡父の遺産を食ひ潰して怠惰な生活を送つてゐる。「彼女の顔からは以前の信頼の表情が消え」、寝椅子に横たはつて小説なんぞばかりを讀んでゐる、無爲にして自墮落な日々を過すカーチャをニコライは窘^ためるが、夫子^{ふうし}自身、人生の「フィナーレをぶちこはし」てゐる己れを顧みて忸^{ちくち}怩たらざるを得ない。

彼はつくづく思ふ、全ての思想や感情や觀念が自分の中ではばらばらに生きてゐて、どんな外界の影響よりも氣高く力強い何かを自分は内部に持つてゐない、さういふ自分には人間を眞に生ける存在たらしめる「精神的な中心が缺けてをり」(トマス・マン「チェーホフ論」)、とどの詰り自分の人生は「天才的に仕あげられた名曲」どころか、實に無意味な斷片の寄せ集めでしかなかつた。それ故、最後にカーチャから、もうこんな風には生きて行けない、助けて、「私はどうすればいいのです?」と訴へられても、ニコライは「私には解らない」と答へるしかなかつた。

戯曲「三人姉妹」のマーシャは云ふ、「なんのために生きるのか、それを知ること——さもないと、何もかもくだらない、根なし草になつてしまふ」。そして又かうも云ふ、「誰も何ひとつわかちやゐ

ないのだ。人はめいめい自分のことは自分で解決しなければならぬ」（神西清譯）。ニコライやマーシャを描いたチェーホフは、人は「なんのために生きるのか」といふ問ひが氣になつてならなかつた。人は己がじし「素晴らしく意味がある」生を求めねばならぬと信じて已まなかつた。それ故、さういふ銘々が孤獨に眞摯に「自分で解決しなければならぬ問題、死ぬ迄問ひの儘に残るかも知れぬ人間ならではの問題を等閑なほざりにして、専ら他人を輕蔑し誹謗ひぼうする「氣晴らし」に興じて「空氣をよごす」スインテリ達の精神的頹廢を彼は何よりも嫌つた。或時、カーチャが皮肉屋の學者と毒舌を競つて愉たのしむのを見て、ニコライは叫ぶ、「いいかげんに黙りたまへ！ なんだつて二匹のひきがへるみたいにすわつて、毒氣を吐いて空氣をよごしてゐるんだね？ もうたくさんだ！」作者の肉聲を聞く思ひがする。（池田健太郎譯、チェーホフ全集八、中央公論社）